

## 南洋にふる雪

—ある漁船員の死—

さながら自殺する如く にぞ

宿毛市小筑紫町、内外の浦

海の見える小高い山の 木立を伐りは

らい

ぼつかり明るい日差しの中に

たどたどしい 木の葉の風が吹いてい

る

少年 S・Fは

磨かれた一面の石に刻まれ

ここにねむる

片親の母を助け

15歳の少年が学業をすて

鮪船に乗り組んだ

稚くもひたむきな

一篇の望郷詩片がある

じつと目を閉じ

わが遠きふるさとの岸边

父母の面影を思い起こさむ

ただ いたづらにそれのみ

さざ波の泡立つ海へ歩みゆく

どこを向いても海と空ばかり

その果てへ鮪を追ってゆく

海面をしばいて唸るロープ

鳶口ぶちこまれ血しぶきあげる

丸太のような鮪 鮪たち

激しく塵囂して 死んでゆくものたち

よ

濃いインジゴの海面に

日の熱射と塩鹹い風の粒々

その果てにいのちの消耗がある

ふと

己れの姿が 黒い影絵となって収斂し

海底深く引きずりこまれていく

錯覚におそわれることがある

雪が降った

ま夏の南洋である

ふわふわ 灰色の

雪のような

それは 灰だった

デッキにもキャビンにも

うっすらと積もった

〈おお 南洋の雪じゃ〉と

両掌でかき集め

頬ばってみせる 剽げ者もいた

闇夜の水平線に忽然と太陽がのぼり

どろりと熟柿のように爛れて

2時間も3時間も

異様に照り 輝き

暗紫色の 茸状の

ケムリともクモともつかぬ

異様のものが わきあがり

そのご激しいスコールがきた

塩漬けの男達は

海水風呂よりは好んで天の水を浴びた

掌にうけて啜りのんだ

それが 放射能雨とは知る由もなかつ

た

無線が頻繁に風向きの変化を告げ

漁場の変更を打電しはじめた

南洋に降る雪も

真夜中に照る太陽も

〈原水爆の実験のせいである〉と

ヒロシマ 原爆の絵 のゆうれいが

夜のデッキや船艙のへりに

ふわあと現れ 己れの影絵となつて

ゆく錯覚にもとらわれた

夜、人知れずぬけ毛を海へ流す者がい

た

艦にしゃがんでひそかに嘔吐する者も

いた

少年もまた

かつてない消耗の激しさに怯えはじめ

緑滴る 故郷小筑紫、内外の浦を

しきりに恋うた

この頃、アメリカ、イギリスなど太

平洋中西部で92回も原水爆実験

を

行っていた

威力はヒロシマ原爆の実に六千数百

発分に当たるといふ

放射能まみれの毒鮪をたつぷり積んで

船脚重く帰港する 夜の甲板で

彼は疲労困憊し

故郷、内外の浦の岨道を

息切れしながら 一歩 一歩

死への坂道を踏みしめ上つてゆく

己れの影をおもいえがいていた……

既に母は亡く 肉親は嫁いで横須賀に

住む姉一人だけ

闇の空から

ひらひら ひらひら

際限なくふりしきる

南洋の雪が

船のライトに浮かびあがつては

海にとけていった

横須賀入港ご

即入院

深更へ今すぐ病院に来て〜と

姉に電話する が

〈面会時間もすぎているから明朝にし

て〉

と、電話は切れた

はるかに遠ざかる夜更けだった

朝はあまりにとおすぎ

彼は 帰り道のように歩み

海へと歩み

入水・自殺

ニュースは「原爆鮪」を連日報道

命がけでとつた鮪は 埋立て廃棄

日・米政府は「魚価の補償」に限る

形で政治決着を図った が

船員の健康問題は完全に無視された

被曝日本漁船は856隻 その約1/2

延べ270隻が高知の船だった

慰謝料8,700万円 一隻(20人

乗組)当たり

49万円

これが生命の値段であった

参考 高知新聞 〈灰滅の海〉

おおさき・じろう  
【大崎二郎】高知  
県須崎市出身の  
詩人。社会派詩  
人として高知を  
拠点に活動し、詩  
作を通して日本の  
戦争責任や平和へ  
の願いを訴えた。  
作品には海を題材  
としたものも多  
く、ヒキニ事件にま  
つわる詩も残し  
た。詩集『その次  
の季節』『走り者』  
など。(一九二八、  
二〇一七)